



Data

監督・プロデューサー・脚本・原案・
 撮影監督・編集：紀里谷和明

出演：江口洋介 / 大沢たかお / 広末
 涼子 / ゴリ (ガレッジセー
 ル) / 要潤 / 玉山鉄二 / 中村
 橋之助 / 寺島進 / 平幹二朗
 / 伊武雅刀 / 奥田瑛二

👁️👁️ みどころ

天下の大泥棒石川五右衛門は、1594年京都の三条河原で釜茹での刑で死亡したはず。しかし、ゲキ×シネ『五右衛門ロック』(09年)では超過激に真砂のお竜(松雪泰子)と共に南の果てのタタラ島に逃亡したが、紀里谷和明監督の『GOEMON』では、一体誰がその刑に?その自由奔放な発想と何でもありの精神は、劇団 新感線と甲乙つけ難い。石川五右衛門と霧隠才蔵が、織田信長の下で服部半蔵を教師とした同期生だったとは!そんなハチャメチャな物語だが、エンタメ性のみならず、深遠な哲学も。私的には『おくりびと』(08年)だけではなく、こんな日本の風景も世界から評価してもらいたいが・・・。

.....

まずは頭を真っ白に!それからスタート!

『GOEMON』とは天下の大泥棒石川五右衛門のこと。パンフレットにある元静岡大学教授小和田哲男氏の「石川五右衛門の虚像と実像」には、「私自身、子供のころから何本もの時代劇映画を観ているが、石川五右衛門を主人公にした映画は観た記憶がない。いつも脇役だったように思う」と書かれているが、こりゃ全くナンセンス。小和田氏は村山知義の名作『忍びの者』や市川雷蔵が主人公の石川五右衛門を演じた映画『忍びの者』(62年)そして篠田正浩監督の『梟の城』(99年)さらに品川隆二が主人公の石川五右衛門を演じたテレビドラマ『忍びの者』をご存知ないのだろうか?つまり、石川五右衛門は豊臣秀吉時代の庶民のヒーローだっただけでなく、織田信長に村民を殺害された元伊賀忍者として信長の後継者たる豊臣秀吉の命を狙う有名な存在。そのため、劇団 新感線でも『五

右衛門ロック』としてゲキ×シネが製作され、5月16日から公開されることになっている。つまり、今年2009年はなぜか石川五右衛門の当たり年なのだ。古田新太が石川五右衛門役で主演した『五右衛門ロック』は、劇団 新感線らしく、月生石(げっしょうせき)を求め南の果てのタタラ島で展開される奇想天外な何でもありの物語だったが、紀里谷和明監督による『GOEMON』もそれに負けず劣らず自由奔放な発想によって製作されたエンタメ作。

石川五右衛門は歴史上実在した人物だが、その実像は知られていない。しかし、石川五右衛門を釜茹での刑にした豊田秀吉はもちろん実在の人物。そして本作に登場する織田信長、徳川家康、石田三成、千利休、茶々なども実在の人物で、NHK大河ドラマをはじめとするさまざまな歴史ドラマでくり返しその英雄像が描かれている。つまり、多くの日本人の頭の中にはそんな歴史上の人物たちのキャラと歴史上果たした役割がインプットされているわけだが、本作を鑑賞するについてまず何よりも大切なことは、それらの既成概念を捨てて頭の中を真っ白にすること。まずは、そこからスタートだ。

こちらの既成概念もとっばらうこと！

多くの日本人にとって、石川五右衛門以上に有名な忍者が霧隠才蔵や猿飛佐助だが、真田十勇士の構成員である彼らは実在の人物？これはどうも怪しいようだ。また彼らは、石川五右衛門とは生きた年代も少し違うはず。ところが本作では、その点でも紀里谷和明監督は自由奔放な脚本を書き、石川五右衛門と霧隠才蔵を同世代の親友(?)という設定にしたうえ、2人とも織田信長(中村橋之助)に仕える服部半蔵(寺島進)の下で修行を続ける若者としたから、こりゃハチャメチャ。

また、猿飛佐助と霧隠才蔵はどちらかという猿飛佐助の方が有名なはずだが、本作では霧隠才蔵(大沢たかお)をメインとし、猿飛佐助(ゴリ)を五右衛門の子分としたところが大胆不敵。ここに真田幸村や後藤又兵衛まで登場してくると話の收拾がつかなくなるが、さて歴史上の英雄たちの物語とは別の闇の世界でうごめく徳川家康(伊武雅刀)配下の服部半蔵と、今は石田三成(要潤)の配下となっている霧隠才蔵、そして天下の大泥棒として自由を謳歌している(?)石川五右衛門の戦いとは？ここでも、私たちの頭の中にある既成概念をとっばらうことが大切だ。

こんな映像、私は大好き！

石川五右衛門役の江口洋介は、『五右衛門ロック』でも執拗に石川五右衛門を追跡するケツタイな役人岩倉左門字役で登場し、ギター侍を含む(?)軽妙な演技を見せていたが、本作でも前半は少し笑いを誘うシーンも。しかし、霧隠才蔵に危機が訪れる後半以降は、ストーリーも緊迫感を高めていくとともに、人物自体もシリアスになっていくから、その脚本はさすが。

他方、紀里谷和明監督の『GOEMON』は最初から海外配給が決定していることもあり、黒澤明監督の時代劇や近時の山田洋次監督の『たそがれ清兵衛』(02年)、『隠し剣 鬼の爪』(04年)、『武士の一分』(06年)のような正統派時代劇ではなく、チョンマゲのない頭、ドレスのような衣装をはじめとして全く自由な発想で製作されている。また、安土桃山時代をイメージしているとはいえ、城の規模から船の形、兵士たちの甲冑姿、武器の類に至るまで自由奔放なイメージ。そこでビックリするのは、俳優たちはその多くを貸し切りの体育館の中でグリーンバックで演じたこと。つまり、俳優はセットも何もない場所で、イメージだけを頼りに演技し、バックはポストプロダクション(編集)段階で入れていったわけだ。したがって、そんな演技を強要される俳優は大変。もっとも、インタビューにおける紀里谷和明監督の言葉によれば、「撮影中からの作業をはじめ、ポストプロには1年半かけています」とのことだから、監督も大変。そんな二重の苦労の末に完成した本作の映像は？私は宮崎アニメの映像は全然好きになれないが、CGがいっぱい活用されていることを当然の前提とした『GOEMON』のこんなインパクトのある映像、私は大好き！

紅一点の使い方は？

『宋家の三姉妹』(97年)の女主人公は、富を愛した霧齡、国を愛した慶齡、権力を愛した美齡の3人。これに対して、浅井長政と信長の妹市との間に生まれた浅井家の三姉妹は茶々、初(はつ)、督(ごう)の3人。彼女たちの物語は井上靖の『淀殿日記』で有名だが、なぜか本作では三姉妹の中で最も有名な茶々だけが登場。2008年のおおさかシネマフェスティバルでは和央ようかが茶々役で主演女優賞を受賞したが、これは『ケイト・ブランシェットの『エリザベス：ゴールデン・エイジ』(07年)ばり(?)の甲冑姿がカッコ良かったため？しかし本作に登場する茶々は、何とその身の警備を命じられていた若き日の五右衛門のお友達で、淡い恋心さえ芽生えていたというからビックリ！

そんな茶々を演ずるのは、『おくりびと』(08年)が予想に反して(?)第81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したことによっておいしい思いをした広末涼子。紅一点となる茶々役を広末涼子が演じることになったのは、紀里谷和明監督の「クラシックで透明感のある女優さんをと考えていたため」とのことだが、『GOEMON』が全世界に羽ばたけば、『おくりびと』に続いて再び広末涼子が世界の注目を集める可能性も？もっとも、『GOEMON』は信長、秀吉、家康、三成など英雄たちの歴史と、五右衛門、霧隠才蔵、服部半蔵などの闇の世界に生きる男たちの生きざまに焦点をあてたものだから、紅一点の存在感はごく一部のみ。そういうハンディキャップは、『おくりびと』以上に大きいが・・・。

釜茹での刑は誰？あっと驚くストーリーに注目！

表の歴史を生きる英雄たちと裏の闇の社会を生きる忍者たちをこれだけ登場させようえ、

2時間8分で完結したエンタテインメント作品を作り上げるのは至難の業。『五右衛門ロック』では、「石川や、浜の真砂は尽きるとも、世に盗人の種は尽きまじ」と石川五右衛門が辞世の句を詠んで釜茹での刑になるシーンが冒頭に登場したが、『GOEMON』でのそのシーンは中盤に登場する。

当初五右衛門は豊臣秀吉の暗殺にまんまと成功するものの、それは影武者。他方、秀吉が茶々を側室にするといい始め、さらに朝鮮と明国に攻め込むと宣言してからは、家康と三成のある陰謀が着々と進行していったが、その陰謀とは？本作が面白いのは、信長を本能寺で襲った明智光秀と秀吉との間にある重大な密約を記した連判状の存在。もちろん、これは歴史上のIFであり、何でもありのデッチあげだが、その自由な発想が日本人にも面白いし、海外向けのアイデアとしても最高。そんな連判状のありかを記した「パンドラの箱」ならぬ「南蛮の箱」の行方をめぐる、前半のストーリーのつくり方も実にお見事。さらに、五右衛門と五右衛門が将来を託すことになる母親（鶴田真由）を斬り殺された少年小平太（深澤嵐）との出会いは、信長と母親を斬り殺されてさまよう五右衛門少年との出会いと同じという設定もお見事。しかして、釜茹での刑で死んでいく男とは一体誰？この見事な設定とそのストーリーを必然にさせていく脚本には、誰もがあっと驚くはずだ。

芸達者なベテラン俳優陣に拍手！我王にも！

私は石田三成役の要潤と猿飛佐助役のゴリはよく知らないが、織田信長役の中村橋之助、豊臣秀吉役の奥田瑛二、徳川家康役の伊武雅刀、千利休役の平幹二郎、服部半蔵役の寺島進は日本人なら誰もが知っている芸達者なベテラン俳優陣。そんな彼らが、1968年生まれの若き紀里谷和明監督の演出どおりの見事な演技を見せているのも本作の特徴。

本作のメインは『GOEMON』というタイトルどおり、『スワロウテイル』（96年）で見事な無国籍男を演じた江口洋介。そして、それを側面で支えるのが霧隠才蔵役の大沢たかおだが、その2人を見事に引き立てたのが、これらベテラン俳優陣だ。とりわけ、奥田瑛二が演じた豊臣秀吉がこれだけの悪人として描かれたのは、『GOEMON』がはじめてだろうから、その悪の演技は大変だったはず。そんな複雑で難解な役柄を見事に演じ切った奥田瑛二をはじめとするベテラン俳優陣に拍手。そしてまた、秀吉のガードマンとして奇妙な存在感を示す我王を演じた、K-1での活躍はイマイチでグランプリを獲得していない韓国の巨漢チェ・ホンマンの頑張りにも努力賞を！

2009（平成21）年5月8日記